

# 関東大震災② 「先見性」

後藤新平だからこそ可能だったとして取り上げた3つの視点は、「迅速性」と「先見性」、そして「継承」です。今月は、斎藤實や徳富蘇峰の話、まるでこの立場になるのを予見していたかのような新平の知見にスポットを当てます。

## 【1 先を見通す】

100年先を見通し、近代都市東京をデザインした「先見性」も非凡なものがありました。幼馴染だった斎藤實の回想の中でも、「新平は子供の時から何事でも先が見えるという風に違っていました。」と述べています。

また、新平自身も、勝海舟から「普通、人間の頸の動きというものは左右に回転させるか、上下に肯くかと、それより他に動かせることはできない。俺の頸は決してそうではない。上下に伸縮自在である」と言われた話をするなど、「先を見通す」ことを意識していたことが窺えます。



## 【2 調査癖（徹底した現状分析に基づく将来設計）】

徳富蘇峰は新平を評して、「後藤伯爵の癖の中で最も著名なる癖は調査癖である。而かも調査ということは後藤伯にとっては、まるで靴か何かのように、随所に付き纏うて居る」と言っています。

実際、新平のこの調査癖は台湾、満鉄、鉄道院と、影の如く、ついて歩いていました。医者が患者の診断に際して丁寧な診察をするが如く、将来設計を構築するのに、徹底した現状分析を常としていたのです。



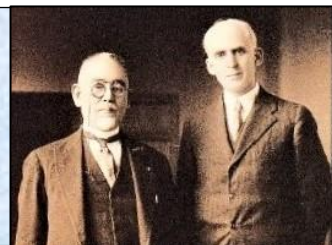
## 【3 欧米視察（世界の最先端を知る）】

新平は、衛生局時代の2年余りに亘るドイツ留学に加え、台湾民政局長官時代に7カ月、東京市長就任前の在野時代の8カ月欧米視察を行い、精力的に各界の士と会談しました。これらの体験は、「都市計画のビジョン」に大きな影響を与えたものと思われます。



## 【4 ビーアドの助言（参謀）】

新平には、良き助言者であり、参謀が存在しました。ニューヨーク市政調査会専務理事の「チャールズ・A・ビーアド」です。東京市長時代、欧米視察の時に知己を得ていたビーアドを招き、その助言によって、「市政調査会」を実現させました。そして、大震災の発生後、直ちにビーアドを招致し助言を得ることとしたのです。



## 【5 帝都復興（100年先を見通した先見性が復興事業に反映され、近代都市東京が姿を現しました）】

(1) 幹線道路：復興道路は、東西、南北の2大幹線を中心にして、幅員22m以上の幹線道路が52本、幅員11m以上の補助街路122本等が1930年までの短期間で、ほぼ完成しました。

(2) 橋梁：大部分の鉄橋は焼け落ち、交通が途絶した苦い経験から橋梁の数を一挙に増大させ、新時代にふさわしい美観も兼ね備えた「耐震耐火構造」となるよう設計し、425の橋を実現しました。

(3) 公園：緑とオープンスペースは、人を救う防火帯や避難地として大いに役立つことが分かり、公園が都市の重要なインフラであると認識されました。三大公園と小学校に隣接した52の小公園が新設されました。

(4) 建物：小学校と公園、両者が一体となって地域コミュニティの中心となるよう配慮されました。この方式は、帝都復興事業で編み出された新しい考え方です。また、国内外から寄せられた義捐金を活用し、鉄筋コンクリート造りの同潤会アパートが建設されました。



【第一号幹線  
(昭和通り)】



【清州橋】



【濱町公園】



【南櫻小学校】